

これからのグローバル社会に必要な資質・能力を育成する柔道指導

葛飾区教育委員会指導室
統括指導主事 駒崎彰一

現在の子どもたちが学校教育を修了し、様々な職業に就いて世界経済の第一線で活躍するであろう20年後、そして30年後の「グローバル社会」を見据えた人材育成、いわゆる「グローバル人材育成」に向けた教育が、世界各国で国家戦略としての取組が進められている。日本においても「グローバル人材育成」に向けた動きが加速し、その育成に向けた指導の手法の一つとして「アクティブ・ラーニング」が提唱され、学校教育も転換期を迎えていると言える。そのような中で、中学校の体育科授業における「柔道（JUDO）」を通して、これからのグローバル社会に必要な資質・能力を育成する方策について考えてみたい。



1 グローバル人材育成

——キー・コンピテンシーや21世紀型スキルの育成——

グローバル人材育成とは、単なる語学力（英会話力）の育成を指すのではなく、相互理解（コミュニケーション能力）や協調性（コラボレーション能力）、価値創造力（イノベーション能力）、社会貢献意識など、様々な資質・能力の育成が想定されている。この資質や能力は「キー・コンピテンシー（key-competencies）」や「21世紀型スキル（21st-Century Skills）」と呼ばれ、世界各国でこれらの育成に向けた取組が広がっている。経済協力開発機構（OECD）

の学習到達度調査（PISA）では、2015年の調査より「協調型問題解決能力」（Collaborative Problem Solving）の調査を実施し、これらの資質や能力の測定を始めており、「国際標準の学力」となるものであると言える。

参考

○「報告書『産学官でグローバル人材の育成を〜』（産学官人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会、2010年4月、経済産業省）」
グローバル化が進展している世界中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材。

○「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」（産学連携によるグローバル人材育成推進会議、2011年4月、文部科学省）」
世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立つて培われる教養と専門性、異なる言語、

文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次

世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間。

2 どうやって育成すればいいのか？

「アクティブ・ラーニング」と言われる「主体的・協動的・探究的」な学びによって資質や能力が育成されると考えられることから、「新しい科目」を導入するのではなく、「伝統的な科目」をいかに教

これまでルーティン化された知識の習得（教え込み）中心の教育から、学び方を習得させる教育が重要であり、「教師主導の教育」から「学習者主体の学び」への転換が必要である。

3 伝統的な科目

——日本人としてのアイデンティティの育成——

日本の伝統文化として国際化された柔道（JUDO）を学ぶことはグローバル人材育成にとって重

要な位置づけになる。日本人の歴史的な背景を理解し、日本的な特性を理解した「日本人としてのア

イデンティティを持った人材」こそが、世界で様々な歴史的背景を持った他者とのコミュニケーションを図ることができるのではないだろうか。

また、「武道」の伝統的な考え方として「稽古」や「師範」といった考え方があり、「稽古」の語源からみると「稽」は「考える」という意味から「古（いにしえ）」を考える「つまり」昔のことを調べ、仲間とともに考えることで、今なすべきことは何かを知る」と

4

授業の転換

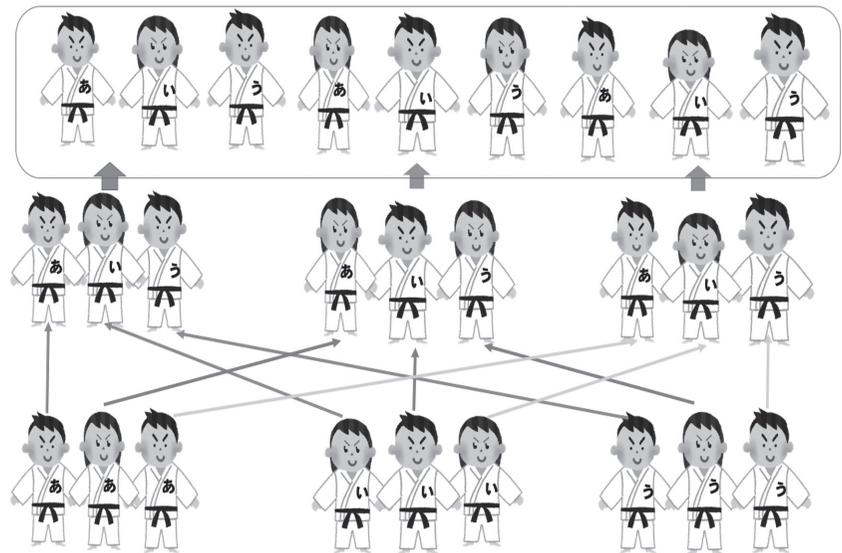
「教え込み練習させる」授業から「自ら学び稽古する」授業へ

これまでの柔道の授業は、教え込み練習型の授業が主流である。これを武道本来の「稽古型」に転換することが「アクティブ・ラーニング」へ向けた学びの転換となり、グローバル人材の育成につながると思われる。

いうことである。また、「師範」は「人の手本となること。また、模範となること」である。

グローバル人材育成には「学習者が主体となり探究して、他者と考えて協調しながら、新しいことや物を創造していく」学びが求められている。武道の「稽古」という考え方、つまり「これまでの伝統、知識を師範の背中を見て学び、仲間と考え、新しい創造をすすむ」といった伝統的な学びが重要になるのではないだろうか。

このような学びを意図的に導入する「学びの型」として「知識構成型ジグソー法」がある。COR EF（東京大学・大学発教育支援コンソーシアム推進機構 <http://conf.u-tokyo.ac.jp/>）が提唱して取り組みを進めている。



知識構成型ジグソー法

これからの社会では、いろいろな意見を集めて「新しいもの」や「新しいこと」を創造することのできる資質や能力が求められていることから、解きたい問いを共有し、各自がその問いを解くのに必要な「部品」を担当して探究し、少しずつ違う考えをそれぞれ説明できるようにして、これらの説明を統合しながら答えを探す学習の型。これにより、コミュニケーション能力「私には伝えたいことがある」ということを自覚させ、コラボレーション能力「私の考えは話し合って良くなる」ことに気付き、イノベーション能力「違う考えを統合すると答えが出る」という楽しさを体得させる学び。

5

グローバル人材育成に向けた柔道指導

これまで述べたように、グローバル人材育成にとって、「武道」特に「柔道」は、最適な教材の一つとなりうるものである。

授業は、目前の子ども達の状態に合わせて、指導者がデザインするものである。グローバル人材育成の考え方に基つき、授業のデザインについて教員も「稽古」を重ねる必要がある。そのヒントとなる一例について以下に示す。

○日本の伝統的な行動の仕方について、歴史的背景や具体的な行動の仕方を調べ、それらをグループで協議することによって、今なすべきことは何かを学ぶ。

○投げ技では「崩し、体さばき、受け身」について、基本動作や

基本となる技を調べ、その理由（根拠）について、グループで協議することによって、自分に合った基本動作や基本となる技を探究することで習得をさせる。

○固め技では「抑え込みの条件」を満たして相手を抑えることについて調べ、けさ固め、横四方固め、上四方固めの原理をグループで協議することによって、自分に合った基本となる技を探究することで習得をさせる。

グローバル人材を育成するための「新しい学び」を日本の伝統文化である「武道」を通して育成することで、日本人のアイデンティティを育成するとともに、世界に通用する人材が育成できる。もう一度、「武道」の素晴らしい点について見直す時期にあるのではないだろうか。



「主体的・協動的・探究的な学び」を容易に引き出すことのできる柔道指導



ICT教育と武道の融合